

会長挨拶



会長 田口 眞弓

いよいよ1989年より始まった平成も幕を閉じ5月1日より新年号が始まります。社会的には2020年の東京オリンピック、そして2022年の世界万博と日本で世界的規模のイベントが開催され多くの人々が集い賑わい経済効果も期待されていますが、一方ではその後の経済事情の先行き不安は拭えないとも言われています。また、全国的な自然大災害の爪痕はまだまだ残り、人々の生活や未来は必ずしも明るくはなく、母子保健においても深刻な少子化問題、虐待、子どもの精神的不安定さや貧困など課題が山積みでもあります。人と人との繋がりで支えられてきた生活や地域が失われ、超高齢社会と言われているこれからの日本社会を支えていく子どもたちが身体的・精神的・社会的にも健康に過ごせるように関わり、生きる力を育むことは母子保健の向上のみならず社会全体の発展にとって大きな課題と言えます。

私たち地域母子保健を担う助産師は、これからの社会の課題にどのようにこたえ、社会の発展のために貢献することができるのでしょうか。私たち助産師は、妊娠・出産・産後と女性が母親になっていく過程に深く関わっています。妊娠中より女性が主体的に生活を見直し、お産に対しても前向きに取り組む、自己効力感を高めていくことは、女性の心身の健康だけでなく、子どもや家族の心身の健康の向上にも影響を及ぼすことが考えられます。産後の母親の孤立による心身の不安定さやストレスによる育児不安も子どもの愛着形成に与える影響は大きいと言われています。助産師が妊娠中よりヘルスの専門家として、その女性の生き方や考え方を受け止め、個別性の高いケアを提供し、女性やその家族にとっても身近な存在として、多職種と連携を深めながら支援することは、これからの社会を支える子どもたちの心身の健康を支えることにつながると考えます。

子どもたちの未来や社会の発展のために、助産師の存在や活動が女性や地域の人々にとってもっと身近な存在となっていくとともに、助産師のケアの質の向上を目指していく必要があります。そのためにも職能団体としての活動は、ますます重要となってきます。私は埼玉県助産師会理事として助産所部会長、そして2016年より会長の任を受け、助産師活動の可視化を推し進めて参りました。今年度を持って会長を辞任することとなりますが、今後も職能団体のさらなる発展のために寄与したいと思っております。引き続き本会の活動に皆様のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



部会活動報告

助産所部会報告

越谷地区 渡辺 セイ

「頼れる助産所 ニーズに応えるために」

助産所部会では、昨年に続き30年度事業として「お産開業助産師によるシンポジウム」を2回開催し、参加者は41名でした。お産開業助産師の魅力の発信とともに助産所業務の可視化にもなり、多くの参加者から高評価を頂いております。助産所研修制度への周知の場にもなり、お産開業助産師が行う助産ケアや切れ目のないケアの提供を実践する助産師の技と心を伝えることで、お産開業者を後押ししています。今後もシンポジウムを継続し、県内外の助産師・学生の方にも積極的に参加していただき、地域の助産師活動としての豊富な経験や運営のノウハウ、現場の様子等、ホットで役立つ情報を提供し意見交換をしていきたいと思っております。

かつて助産所は地域の妊産婦とその家族に女性の健康支援者としての役割を求められてきました。そして住民のニーズの元、多くのお産が助産師の手で行われてきました。大先輩の技と心を受け継ぎながら安全なお産のスキルを高めて研鑽をしていくことや、地域住民との顔の見える関係性を築き、女性とその家族の健康を守る社会資源として地域にいる開業助産師の存在を広く周知し、示していくことが助産所部会の重要な活動と考えております。

私は、助産院運営の基本方針は母子の健康・生命を第一と考えております。昨今の医療安全の観点はお産の場においても欠かせません。科学的根拠に基づいた安全なお産を提供しつつも、「妊婦さんが気軽に相談できる助産師、頼れる助産所」として安全な助産業務のためのリスクマネジメントに力を注いでいく所存です。助産業務ガイドラインを遵守することは母子の命を守ることに繋がると切に感じています。また、産婦さんとの人間関係は一期一会として大切にしたいと考えております。

私は地域の仲間を支えられて助産院を運営していると感じています。活動の根源は健康です。部会員の皆様も健康に留意して、更なる一步を踏み出しましょう。



保健指導部会報告

東松山地区 大野 幸子

「助産師会に育まれて」

看護師として病棟で5年勤務した後、助産師学校へ進み助産師の資格を得ました。その後産婦人科で2年働き結婚と共に退職し臨床からは退きました。

出産、子育てが始まり暫くは仕事から離れることを覚悟していましたが、長女が1歳の時に再び助産師として新生児訪問の仕事をしていただく機会が与えられました。助産師活動を行うなら助産師会に所属したいという思いもあり間もなく入会しました。

所属する地区の助産師会は少人数のため、常に何かの役に付かざるを得ない状況でした。「私などに務まるだろうか…」という心配は常にあったものの、気が付けば地区長、いっしょにお産の企画担当、また毎年保健指導部会の地区代表などを担ってきました。

助産師としての知識や経験が少ない私にとっては仲間と共に情報を共有したり、助産師会の研修会に参加することにより多くの学びを得ています。日々の働きの中では助産師と会うことがほとんどないため、助産師の仲間と語り合えることは私にとって貴重な体験となります。また、自分の地域のみでなく、県全域で行われている助産師の活動も知ることができ大きな励みとなっています。私の歩みは助産師会の中で、また助産師の仲間を通して育まれてきたことを感じています。

新生児訪問の仕事は今年で12年目となりました。訪問した時の子供達が、娘の通っている小学校に在学しているのを見かけると「赤ちゃんだったあの子が、こんなに大きくなったのか…」とその子の成長を嬉しく感じ、感慨深いものがあります。訪問に出かける前には「今日はお母さんからどんなお話を聞かせていただけるのだろう」と常に聞く姿勢を第一に臨んでいます。

助産師として地域で働かせていただけることに感謝し、これからの時代に求められている助産師職の在り方について、今後も助産師会を通して学び、自己の研鑽に努めていきたいと思っています。

